

第5章 文化財の保存・活用に向けた課題

1 保存・活用の現状

伊豆の国市内では、行政のほか民間団体や市民組織などにより文化財の学習や保存・周知・活用などの活動が行われている。各組織・団体は、独自性や専門性を活かして、それぞれの立場から文化財に関わっている。

(1) 体制

ア 伊豆の国市

伊豆の国市は、静岡県などと連携しながら、各部署が以下のような事業を行っている。

表 5-1 伊豆の国市の各部署の実施事業

文化財課	<ul style="list-style-type: none"> ①文化財シンポジウム：市内の文化財をテーマに講師を迎え実施 ②文化財講座：市内の文化財をテーマに講師を迎え実施 ③伊豆の国市郷土資料館企画展示：市内に関連するテーマを中心に実施 ④ワークショップ：郷土資料館の企画展示に関連した講座を実施 ⑤出張講座：(1)学校向けに火起こし体験と山木遺跡のミニ講座を実施 (2)学校向けに民具を用い、社会科の授業を実施 (3)子供向けに勾玉づくり教室を実施（生涯学習講座） ⑥市内文化財マップの発行：歴史めぐりマップ ⑦歴史ガイドの会研修会 ⑧発掘調査・修理報告等現地説明会：葦山反射炉、葦山城跡等 ⑨文化財に関する防災訓練の実施（所有者との共同事業） ⑩葦山反射炉の夜間開館及びライトアップ
観光文化課	<ul style="list-style-type: none"> ①市内周遊型バス「歴バスのる～ら」の運行 ②北条五代観光推進協議会加盟自治体等との情報交換 ③葦山反射炉等で竹灯籠の実施 ④北条家歴史散策マップの発行
商工課	<ul style="list-style-type: none"> ①パン祖のパン祭
都市計画課	<ul style="list-style-type: none"> ①江川邸と葦山反射炉を結ぶ道路の美装化 ②歴史的風致維持向上計画重点地域の景観を阻害する電柱の撤去・移設



葦山反射炉保存修理工事現地説明会の様子



ワークショップの様子

イ 観光商工関連団体

観光商工関連団体としては、一般社団法人伊豆の国市観光協会、伊豆の国市商工会、伊豆の国市建設業協会が活動を行っている。

○一般社団法人伊豆の国市観光協会

一般社団法人伊豆の国市観光協会は、市内・他市町村・他県・他国からの観光客を増加させることを目的とし、情報発信やイベントなどを実施して観光による地域経済への波及効果を創出する活動を行っている。主な活動内容は以下のとおりである。

- ・源氏あやめ祭

古奈区出身のあやめ御前にあやかっぺ実施している。令和3年度(2021)で86回目を迎え、伊豆の中でも随一の歴史を誇る観光祭。

- ・伊豆の国花火大会

8月初めの当地お盆の時期に、各地域で花火大会を実施している。

- ・宣伝、集客事業

各種宣伝媒体を活用して、集客及び広告効果を上げる誘客事業を行っている。

- ・運営事業

観光案内所や着地型旅行商品の開発などを行う旅行業運営事業等を行い、現地についてからのおもてなし事業を行っている。この一環として、葦山反射炉をはじめとした文化財の紹介を行っている。

- ・芸妓まつり

昭和の初期に祇園と伊豆長岡にしかなかった芸妓学校を前身とする伊豆長岡見番を、本物の伝統文化として発信していく事業。

- ・鶴払い祭

あやめ御前と頼政の馴れ初めにあたる鶴退治の物語を、地元中学生が舞い、観光誘客に繋げている。

○伊豆の国市商工会

伊豆の国市商工会は、市内の特色ある地域資源をコンセプトとした「伊豆の国ブランド」の認定を進めており、葦山反射炉や北条義時等の文化財や歴史人物に関連した商品をストーリーとともに発信することで、商品を通じた市内の歴史・文化財等のPRに寄与している。また、地域ゆかりの源頼政に係る妖怪「鶴(ぬえ)」をモチーフとしたキャラクターを制作し、同キャラクターを商談会やイベント等で積極的に使用することで、消費者等の関心の獲得、市内の魅力発信に努めている。さらに、商工会女性部では、自ら地域の文化財等を現地研修し、事業者から消費者に地域の魅力を直接発信している。

○伊豆の国市建設業協会

伊豆の国市建設業協会は、おもてなし活動の一環として、葦山反射炉に隣接する準用河川葦山古川の清掃及び北東部公園の草刈を実施している。

ウ 文化振興関連団体

文化振興関連団体としては、公益財団法人江川文庫が活動を行っている。

○公益財団法人江川文庫

韮山韮山地区に所在する江川家には、重要文化財に指定されているものを含め、代官の職務に関わる公文書や江川家の私文書などからなる古文書類、多くの典籍、書画・工芸・洋書・古写真などの貴重な資料が保管されている。さらに、敷地は国史跡「韮山役所跡」、建造物は重要文化財「江川家住宅」に指定されている。公益財団法人江川文庫は、これらを管理・運営するとともに、公開活動も行っている。また、多くの研究者の閲覧要求に応じ、展覧会への出展や自治体史出版のための調査に協力してきた。

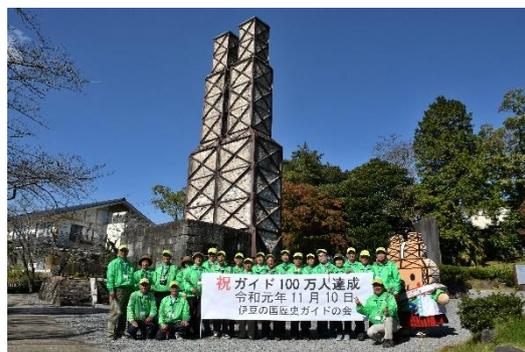
平成14年（2002）から、これまで非公開だった資料を含め、静岡県が主体となり文化庁の後援を得て、整理・調査が始められ、目録を作成した。その点数は6万点以上に及ぶ。現在、公益財団法人江川文庫と大学共同利用機関法人国文学研究資料館の協力のもとに「伊豆韮山江川家文書データベース」がホームページに公開されている。

エ 市民組織

文化財にかかる代表的な市民組織として、伊豆の国歴史ガイドの会、伊豆の国外国語ガイドの会、伊豆の国市文化協会、NPO法人伊豆学研究会、NPO法人韮山城を復元する会、韮山反射炉を愛する会、火起こし隊、大仁考古学研究会がある。

○伊豆の国歴史ガイドの会

伊豆の国歴史ガイドの会では、韮山反射炉・江川邸を中心に、市内の史跡ガイドを行っている。韮山反射炉に在駐している他、予約申込を行うと、目的やテーマに沿った、より深みのある史跡めぐりのガイドを行う。さらに、市内の文化財を巡るツアーを計画・実施している。



伊豆の国歴史ガイドの会

令和元年（2019）にはガイド案内人数100万人を達成し、令和3年（2021）にガイド活動開始20周年を迎えた。また、令和2年度（2020）に静岡県の「ふじのくに文化財保存・活用推進団体」に認定された。

○伊豆の国外国語ガイドの会

美しい日本、文化の誇り高き日本、その日本人の温かいおもてなしの心を、ガイドを通して伊豆の国を訪れる外国人に伝えることを目的として結成された。韮山反射炉、江川邸及び願成就院を中心に、主に海外からの観光客を対象に英語等の外国語によるガイドを行っている。休日に韮山反射炉に在駐している他、予約申し込みを行うと、テーマに沿ったガイドを

行う。

令和2年度（2020）に静岡県の「ふじのくに文化財保存・活用推進団体」に認定された。

○伊豆の国市文化協会

伊豆の国市文化協会は、市内の文化活動団体64団体からなる組織で、学芸部・工芸部・美術部・伝統工芸部・歌唱部・舞踏部・演奏部に分かれている。

○NPO法人伊豆学研究会

NPO法人伊豆学研究会は、地域の住民に対して文化財保存・利活用等に関する事業を行っている。令和2年度（2020）には、静岡県「ふじのくに文化財保存・活用推進団体」に認定された。伊豆地域の活性化に寄与することを目的として、以下のような事業を行っている。

- ・文化財の保存・利活用事業
- ・『伊豆大辞典』の刊行と普及
- ・文化財ウォーキングの実施
- ・文化講演会・講習会、音楽会等の開催
- ・伊豆半島を中心とした文化財の調査、研究、情報収集、発信
- ・古文書学習会の開催

○NPO法人韮山城を復元する会

NPO法人韮山城を復元する会は、韮山城を復元するための活動を中心として地域の歴史文化を保存継承し文化振興を図り、地域の活性化に寄与することを目的として、以下の事業を行っている。

- ・復元整備事業
- ・普及啓発事業
- ・視察交流事業
- ・史跡内の草刈り、清掃活動

○韮山反射炉を愛する会

韮山反射炉を愛する会は、韮山反射炉及び江川英龍について共に学び合い、その輪を広げることが目的とし活動している。令和2年度（2020）には、静岡県「ふじのくに文化財保存・活用推進団体」に認定された。会では、韮山反射炉に関する以下の事業を行っている。

- ・講演会の開催
- ・韮山反射炉検定やその他教材の作成
- ・反射炉を題材とした俳句と短歌の募集・発表
- ・史跡内外の清掃や草刈り

○火起こし隊

火起こし隊は、平成20年（2008）から、主に伊豆の国市内をはじめとする近隣市町の



火起こし隊による火起こしの様子

第5章 文化財の保存・活用に向けた課題

小学生に向けて、マイギリ式の火起こし体験のボランティア活動を行っている。火起こし体験は予約を受け、葦山葦山地区の城池親水公園で実施しているが、要望があれば個別の小学校へ出向いて行っている。

○大仁考古学研究会

大仁考古学研究会は、昭和55年(1980)に発足し、大仁地区を中心に40年間にわたって文化財保存・普及活動をしている。発掘調査に参加した女性を中心として結成され、考古学に親しむことを会の目的とし、発掘調査の経験を生かし、以下のような活動を行っている。

- ・史跡の草刈り、清掃活動

(2) 学校教育における文化財活用

市内の小中学校における、授業での文化財の学習機会、校外での史跡等の見学の実施状況は、表5-2のとおりである。校外での史跡等の見学が各校で行われており、その対象施設には葦山反射炉・江川邸などが含まれている。

また、市内外の学校による市営文化財関係施設の見学や体験学習の利用状況は表5-3のとおりである。令和2年度(2020)の葦山反射炉・伊豆の国市郷土資料館・文化財調査室の3施設の利用状況は、5,962人であった。市内外にわたり、学校教育において市内文化財に接する活動が行われている。

表5-2 市内小中学校 文化財(歴史文化)学習実施状況調査結果

学校名	授業での文化財学習			校外社会見学 (対象文化財)											対象学年	
	実施状況	実施方法	対象学年	実施状況	葦山反射炉	葦山城跡	江川邸	蛭ヶ島	願成就院	堀越御所跡	政子産湯の井戸	眞珠院	成福寺	北江間横穴群		平石古墳群
長岡北小	○	既成の副読本 副読本や資料等	小3 小6	○	●		●							●		小3 小6
長岡南小	○	教科書による 既成の副読本	小3 小6	○					●			●	●			小6
長岡中	○	外部講師活用 葦山反射炉検定	中1	○	●		●									中1
葦山小	○	教科書による	小6	○	●	●	●		●	●	●					小6
葦山南小	○	既成の副読本	小4	○	●		●		●							小6
葦山中	○	図書館やネット 葦山反射炉検定	中1	○	●				●							中1
大仁小	○	教科書による	小6	○	●		●	●							●	小6
大仁北小	○	既成の副読本	小3 小6	○	●	●	●								●	小3 小6
大仁中	○	図書館や教科書 葦山反射炉検定	中1	○	●											中2

表 5-3 児童・生徒による文化財施設利用状況

年度	葦山反射炉	伊豆の国市郷土資料館				文化財調査室		3 施設合計	
	反射炉見学	資料館見学		火起こし等体験学習		文化財体験学習			
	人数	学校数	人数	学校数	人数	学校数	人数	学校数	人数
平成30年度	15,160	1	133	9	679	2	87	12	16,059
令和元年度	13,999	2	90	16	958	5	357	23	15,404
令和2年度	5,820	1	79	1	63	—	—	2	5,962



火起こし体験をする小学生



郷土資料館を見学する園児

2 保存・活用に関する市民の意識

文化財の保存・活用に向けた課題を整理するにあたり、市民の意識を把握しておく必要がある。本計画作成にあたり、令和3年度(2021)に各種市民団体の代表者にアンケートを実施したところ、以下のような結果となった。なお、アンケートの詳細については資料編に示すとおりである。

- 回答者では、市内の文化財の保存・活用の重要性は強く認識されていることが確認できる。
- 市内の主要文化財の認知度は、葦山反射炉、江川邸(江川家住宅・葦山役所跡・江川家関係資料)、願成就院(運慶作諸仏)等、建造物や美術工芸品についての認知度は高いが、古墳等の遺跡についての認知度が低く、文化財の種類による関心や認知の差が指摘できる。
- 葦山反射炉、江川邸、願成就院は「市のシンボルである」という意見が過半数を占める。また、同文化財については、お客様に「一通り説明ができる」と回答した割合が多い。これらの文化財は回答者にとって重要視されているため、同様に考える市民から今後の保存・活用について強く求められる可能性が高い。

表5-4「市内文化財の保護や活用についての意見や要望(自由回答)」の意見(抜粋)

現状では、文化財を単体として点的にとらえての保護・活用のように感じている。
しっかりと保護されているものと、そうでないものの差が大きく出ているように感じる。
未指定・未調査の文化財で調査の結果重要なものであることがあるため、これらの所在調査や本調査の担い手の確保に向けた取組の実施をお願いしたい。
保護も重要だが、より積極的に活用に取り組む必要がある。観光はもとより、地域の活性化に結び付いていけば良い。
貴重な文化財が多数所在する一方、保存・活用が同様の文化財がある地域と比較して不十分。

表5-5「市内文化財の将来のあり方について(自由回答)」の意見(抜粋)

市内の文化財を知らない人が多い印象がある。市民が知ること、そこから輪が広がり多くの方に伝わるはずである。気軽に市民が知ることのできるようなイベントを、市が支援してほしい。
市内に現存する文化財とその隣接環境の自然的、歴史的環境の保全を徹底して図り、広く歴史的文化地域として総合的に保護・整備を進め、それが景観上視覚的に認識をされ、観光地として魅力あるまちづくりに反映されること。
文化財という言葉に難しいイメージを持っていたが、市内にあるそれらのものを身近なものとして、見学や研修をしたいと思った。市への来訪者へのおもてなしに活用していきたい。
山木遺跡から葦山反射炉まで各時代の史跡が分かりやすく整備保存され、市民の誇りとなり、観光集客に結び付くことが理想。
市民が市内に現存する文化財への認識を深められ、その保存・整備または活用に理解され、文化的資源豊かな観光地としての他にはない誇れる街づくりに関心をもたれること。

また、本計画の前身である歴史文化基本構想策定に先立って、平成24年度（2012）に市民意向を把握するアンケート調査（16歳以上の市民1,000人（無作為抽出）を対象、有効回収数338票）を実施している。この調査の結果、以下のような特徴を指摘することができた。

- 地域の歴史・文化財等への関心度が高い人が積極的に回答した可能性が高いが、回答者の中では、市内の文化財・遺跡の保存・活用の重要性は、市民にかなり強く認識されていることがわかる。
- 市内の主要文化財・遺跡の周知度は、葦山反射炉、蛭ヶ島、葦山役所跡（江川邸）の上位3件を筆頭にかかなり高いが、周知度中位以下のものでは「知っていても行ったことがない」の割合が高く、また、「特に関心があり保存・活用が重要」と指摘される割合では葦山反射炉と葦山役所跡（江川邸）が突出し、他の文化財・遺跡との間に大きな格差があること等から、市民の関心に偏りがあるといえる。
- 「葦山反射炉」は居住地区に関わらず群を抜いた周知度を示しているが、全体の周知度が低い文化財・遺跡では周知の度合いが所在地区の住民に偏る傾向もあって、必ずしも全市的な浸透がなされていない状況も見られる。知っていても、お客様に「説明できると思う」割合が、葦山反射炉と葦山役所跡（江川邸）のほかは相対的に低く、この面でも他の文化財・遺跡の周知が相対的に十分ではないことを表している。
- このような状況は、認知のきっかけとして「地元なので自然に」の割合がいずれも多いことのほか、葦山反射炉と葦山役所跡（江川邸）は「学校で習った」の割合の高さが目立ち、教育の場などにおける全市的な周知活動の重要性を物語っている。参加しても良い活動として「学習機会への参加」が突出していることから市民の学習意欲の高さが伺われ、これに応えたより幅広い学習機会の提供や情報提供の必要性が指摘できる。
- 一方、葦山反射炉と葦山役所跡（江川邸）で「市のシンボリックな存在」、葦山城跡で「人々の憩いの広場・公園空間」をイメージとしてあげる回答が多いことは、今後必要な整備内容として「案内表示」を求める声の大きいことと合わせて、観光も含めて親しめる場としての活用が求められていることを表しているといえる。

3 課題の整理

前述の市民意識調査結果及び前章までに述べた市の現状を踏まえると、伊豆の国市の文化財の保存・活用における課題が以下のように整理される。

①調査・研究・教育活動に関する課題

- 建造物・美術工芸品・民俗文化財・遺跡については、一定の状況把握がなされているが、詳細調査に至っていないものも残る。また、無形文化財・名勝地・動物・植物・地質鉱物等、十分な把握が出来ていない文化財がある。さらに、町史編纂事業により把握された文化財は、調査から期間が経過しているものもあり、現状の把握が十分でない。
- 貴重な資源の発掘、調査・研究、保存・管理を的確に行うための体制の確立と計画的な保存・管理活動の推進が必要であるが、十分であるとは言えない。
- 調査を実施した文化財について、系統的な整理・データ化や周知が図られていない。
- 伊豆の国市は様々な時代の文化財が重層的に蓄積しているのに対し、それらを整理しつつ地域の歴史として正しく伝え、市民が文化財を理解し、関心を持ち、誇りを持つような働きかけが不十分である。

②保存・継承に関する課題

- 適切な保存に繋げるための市内の文化財の把握、対策が十分でない。
- 指定・登録文化財及び埋蔵文化財の適切な保存のため、現状変更等を実施するには法令で定められた手続きが必要になるが、所有者の手続きに対する理解が十分でない。
- 伊豆の国市の文化財を保存していくためには、所有者や地域住民等とのネットワークを強める必要があるが、行政・民間の協働による保存、管理の体制づくりが不十分である。
- 民俗文化財について、担い手の不足や高齢化により、今後実施や継承が困難になることが予想され、人材の確保や現状の記録保存が必要であるが、十分な対策が取られていない。
- 住民の高齢化による世代交代や転居等により、相続人や新たな所有者等が価値を知らずに、廃棄や散逸、あるいは所在不明となる文化財が発生するといった問題の増加が懸念されるが、十分な対策が取られていない。

③公開活用・普及に関する課題

- 文化財の存在をよりわかりやすく、人々が身近に感じやすくするための案内・サインや解説資料等の整備が不十分である。
- 文化財に触れ、わかりやすく学び親しめる関連施設の充実への取組が不足している。
- 伊豆の国市郷土資料館について、伊豆の国市の文化財の公開・活用の拠点としての機能が不足している。
- 日本史上重要な文化財が蓄積しているが、その価値を高め、国内外にアピールし注目度を高めるための情報発信の工夫と努力が不足している。
- ガイド等、文化財の価値をわかりやすく説明し、広めることができる情報媒体の作成及び人材の確保・育成が不十分である。
- 文化財の保存・管理と観光を両立させつつ結びつけ、効果を及ぼしあえるような連携体制を、行政、民間にわたって築いていく必要があるが、取組が不十分である。

④全体に関する課題

- 文化財が集中している地域の周辺環境も含め、文化的な空間が創出出来ていない。